北海道大学　大学院農学院　修士論文発表会，2014 年 2 月 7 日

都市近郊の自然歩道利用者の行動と意識

～札幌市三角山・円山を事例として～

環境資源専攻　森林緑地管理学講座　花卉・緑地計画学　魏　子祺

１．はじめに

現在,経済の発展や生活水準,価値観の変化によって,森林が持っている機能に対する意識も特定の効用のみではなく,総合的な効用を求めるようになった。森林レクリエーションサイトにおいて,利用者の利用動機と行動パターンは, 適切な管理と計画にとって重要な情報となる。しかし,利用者の動機と行動との関係の体系的な理解は，不足している。近年,都市住民の森林や自然への関心が高まり,都市の周辺の環境を維持する為に,市民自ら都市林を守る活動が活発化した（佐藤，八巻，後藤，1997）。本研究では,都市近郊林における利用の現状と利用者の意識を明らかにするために,札幌市の自然歩道,市民の森の利用調査の一環として,円山ルート,三角山ルートの利用者を調査した。利用者数の年間変動,自然と社会的な影響要因の影響,利用者の意識から,今後の課題を考察することを目的とした。

２．方法

2012 年 10 月～11 月に，円山の八十八ヵ所と動物園裏，三角山の山の手,宮の森,大倉山の各登山口に， Eco-Counter 社製の PYRO 赤外線カウンターを設置し,利用者数と移動方向を記録した。2012 年 10,11 月と 2013 年 2,5,8 月の金,土,日曜日の各三日,調査員による実測を行い,同時に利用者に意識調査票を配布した。利用変動にかかわる要因を明らかにするため、季節、平休日、気象条件に関る変数を独立変数として、ステップワイズ法による重回帰分析を行った。

３．結果と考察

赤外線カウンターと調査員による実測は，高い相関を持ち，赤外線カウンターによって年間の利用者数と変動要因を把握することが可能であることが示された。円山と三角山における年間の利用は,春,秋に利用のピークが有り,特に 6 月が最も多く,冬でも一定の利用者がいた。利用者数の変動に対する正の要因は,日照時間の影響が最も強く,休日も要因となっていることがわかった。降水量,積雪量,冬は,利用者数の負の要因となっていた。登山口の立地や,アクセスの状況によって，利用者数や変動要因が異なることが明らかとなった。

意識調査において，高齢の退職後の市民が定期的に自然歩道を，日常的な運動の場として利用していることが明らかになった。利用者の満足度は高いが，小動物への餌付けやヒグマの出没による閉鎖が問題としてとらえられていた。また，市民による協働管理は， 7 割の利用者が参加意欲を示した。

これらの情報は,各登山口に行う利用状況に関する情報を提供に役立てることが出来るものと考えられる。都市近郊の自然歩道は，市民が身近に自然とのふれあいを楽しむ場所でもあるため,問題への対応には利用者の意見も踏まえて対応することが望ましい。